

光圀一行

匠 探訪

188

水戸黄門として知られる水戸藩第二代藩主徳川光圀は、1700（元禄13）年に73歳で亡くなりました。それからおよそ50年後には黄門の漫遊逸話集が生まれたとされます。

1695（元禄8）年1月、江戸の水戸藩邸から8日間かけ西山荘（茨城県常陸太田市）へ帰る際に、下総国の諸社寺を

参詣しました。当時光圀は藩主を退いていましたが、一行は同月16日に江戸を出発、3日目の19日は中村（現・多古町）に宿泊し、翌20日に飯高寺、妙福寺、飯高妙見宮（飯高神社）に立ち寄り、同日夜は太田村（現・旭市）に泊まりました。

『旭市史』によると、一行の総勢は334人。随行者は側用人、食事

に関する賄人と、まかいだん 庖丁人、医師、馬5匹を管理する馬屋衆、かごを担ぐ籠衆、飛脚などでした。これらは、太田村と成田村（現・旭市）の農家に分宿し、近隣11カ村も道案内など手助けをしました。

一行の宿泊地太田村では数日前から農家で火を使うことに制

限があったり、子どもを外で遊ばせなかったりなど厳しい態勢がとられたなどの言い伝えを聞きました。

飯高村では、飯高妙見宮と妙福寺への新たな参道2本を新設しました。このうちの1本は現在も池田堤として残されています。また、鳥居から妙見宮への150数段ある石段もこの時に造られたのではないでしょう。こうした大工事は飯高村だけで成し遂げられるものではないことから、多くの近隣村から援助や協力があつたのでしよう。

光圀没後100年ほどした1803（享和3）年に飯高寺から水戸藩邸に提出した記録に、光圀は元禄8年の参詣後2度訪れたとありますが、当時は体調が思わしくなかったとされます。

飯高寺周辺には黄門桜などゆかりの史跡が残されています。

（市文化財審議会委員・

依知川雅一）

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



飯高神社の階段